屍ヶ台

骨休め

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
屍ヶ台

【Ｎコード】
Ｎ７５３２Ｘ

【作者名】
骨休め

【あらすじ】
新婚の姉貴のマンションで始まった怪奇現象。児童虐待をする隣家の母親の仕業と信じて疑わない姉貴とそれに違和感を覚える俺。深夜の訪問者の目的は？ほんの１５０年前の日本で何が行われていたのか。人間はどんな罪を犯してきたのか。屍ケ台と呼ばれる因習の土地で繰り広げられる事件を展開していきます。

姉貴の家の訪問者（前書き）

この章にはグロい表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

姉貴の家の訪問者

1章　姉貴の家の訪問者

「もう、本当に腹が立つ！」

結婚して家を出ている姉貴の、今日の第一声はそれだった。

少し前から頻繁に実家に電話をするようになっている。なんでも、新居として住み始めた賃貸マンションの隣室から、子どもを虐待するような怒鳴り声が、毎晩、響くのだという。

「深夜の1時とか2時に、延々1時間ぐらい喚き続けてるのよ、その母親。異常すぎじゃない？」

そんな報告を聞けば、無関係な独身男の俺としても、なんとなく心がざわつくものである。

「児童相談所に通報すれば？」

無難ながらアドバイスすると、俺よりはるかに血気盛んな姉貴は、「隣の子をつかまえて学校とクラスを聞き出したから、まず小学校に連絡してみる。それと、隣の家の玄関先で、『いい加減にしてよね、毎晩毎晩！』って大声出してやったわ」

と鼻息を荒くした。苦笑しながら、でも俺としては隣人トラブルで刺されたりしねえだろうな、と心配になってみたりもした。

その姉貴の本日の怒りの要因はこれだ。

学校に連絡を取ってから数日、隣家の声は聞こえなくなった。一昨日には地区の民生委員も訪問していたそうだ。地域絡みで虐待阻止に乗り出したんだな、と安心した姉貴は、昨夜も達成感から健やかに熟睡していた。

深夜2時。なにかが聞こえたような気がして目を覚ました。夜中の物音には敏感になっていた。耳を澄ますと、ぼそぼそと喋る複数の人間の声が聞こえる。玄関先から。

仕事で疲れている旦那を起こす前に、正体を見極めてやろうとし

た姉貴は、こっそりと玄関に歩み寄った。覗き窓から外を覗くが、暗いばかりで動くものは見えない。声は途絶えている。気配もない。
気のせいだったかと身を離したとき、突然インターホンが鳴ったそうだ。重ねるが深夜2時。尋常じゃない。
「ヘタレだと思うけど、怖くて玄関、開けられなかったわよ」
そう意気消沈する姉貴に、
「絶対開けんなよ」
と釘を刺して、その日の会話は終わった。

次の連絡は翌々日。
会社から帰ると、お袋が受話器を握り締めながら青い顔をしている。何事かとそばに寄ると、姉貴からだという。精神的に弱いお袋と電話を換わった。
「俺。今、帰った。どうかしたの？」
「あ、リョウちゃん？ちょっと気持ち悪いことになってるのよ」
姉貴は、珍しく取り乱した様子で、畳みかけた。
「一昨日、話した深夜のインターホンだけど、電話したその夜も昨日も、続けて2時から3時頃に鳴らされるの。カイさんに出てもらったんだけど、こっちの動きを察したみたいで逃げられた後だった。今夜も来そうで、ちょっと滅入ってるの」
カイさんというのは姉貴の旦那だ。大手の自動車部品会社に勤める技術者で、毎日のように帰りが遅いと姉貴がこぼしていた。
「今度は調べに行く前に警察を呼んだら？もしくは監視カメラつけようぜ」
そう提案すると、
「監視カメラかあ…。やってもいいけど、明日になっちゃうよね。今晩、カイさん出張でいないのよ。どうしよう…」
と答える。
結局、お袋の後押しもあって、俺はその晩、姉貴の家に泊まりに行くことになった。

引越しの手伝い以来、久々に訪ねた新居は、すでに綺麗に片付けられていた。姉貴はむしろ潔癖症に近い性格で、俺の部屋が汚れているのも我慢ができずに、よく勝手に物を捨てられた。非難する俺を、

「部屋の汚れは心の汚れ！」

と汚物扱いしたのも、今となっては、なんだか懐かしい。

「一応、ここに入る前に隣の家の物音を探ってみたけど、怒鳴り声とかはしなかったぜ」

と開口1番に言うと、

「うん。声は聞こえなくなったね。でも、だからって虐待が止んでるとは言い切れないじゃない？非常識な嫌がらせするような母親なんだし」

と答える。姉貴は深夜の訪問者が隣家だと確信しているようだ。

「複数の人間の会話が聞こえたんだろ？隣って家族何人？」

「母親と小学生の女の子だけみたい。お父さんは見たことない」

その説明に、俺は首を傾げる。深夜2時、母子家庭にわざわざやってきて嫌がらせに加担する物好きがいるんだろうか。

「ふうん…。まあいいや。捕まえりゃはっきりするし」

そう言うと、姉貴はホッとした顔をして、

「よかった。リョウちゃんが逞しくなってくれてて」

と微妙な表現で褒めた。

「あ、でも、番してくれるのは嬉しいけど煙草は吸わないでよ。お風呂の排水口の髪の毛はちゃんと拾ってね」

釘を刺すのも忘れない。

相変わらずうるせえなあ。それが人にモノを頼む態度か。

0時を回って姉貴が消灯の時間に入った。俺も明日の出勤のために眠っておかなければならないが、なんだか目が冴えてしまった。電気の消えた部屋の中で携帯をいじりながら、耳を澄ます。

隣家からは何のアクションもなかった。もしかしたら、この後の悪戯に備えて誰かが訪問して来るんじゃないかと疑ったが、気味が悪いぐらい静まり返っている。

「訪問者、か」

姉貴に聞こえない声量で呟く。なんとなくゾクッとする響きだ。相手の顔が見えないから無闇な想像をするんだろう。インターホンが鳴ってドアを開けたとき、そこにいるのが目を釣り上げて怒りの形相を顕わにした母親だったらＯＫなんだ。いや、それ以外ありえないか。姉貴はお節介だが、間違ったことをして他人の恨みを買うような奴じゃない。

少し眠気を感じ始めた俺は、布団を持って玄関先に移動した。音を聞き逃して、姉貴に、また明日から怖い思いをさせるのもアレだし。

…足音がした。ような気がした。

慎重に起き上がると、俺は手元の携帯を見た。時刻は2時を少し回っている。

狭い玄関を挟んだ先にドアがある。その向こうから、やっぱり何かの音がする。妙に乾いた響きだ。足音とは違う。布団から這いでて、厚い鉄製のドアに耳をつけた。話し声はない。カシンカシン、と、耳慣れないそれは、移動する気配もなく、この家の前に留まっている。

枯れ枝でコンクリの床を叩くような音だな、と思った。水分の抜けた物体が奏でる軽い振動。わずかの衝撃で簡単に折れそうな脆(もろ)い質感。

唐突に思い出した。大学時代、ワンダーフォーゲルの部活動をしていた俺は、2年生のひと夏、先輩に連れられて山岳救助に携わらせてもらった。天候の良い日に限り、行方不明者の捜索に山々を歩きまわる。一般的な登山者が行かないような深い谷や雪渓にも足を運んだ。

「こんなことしても見つかる可能性はほとんどないんだよね」
とあきらめムードのプロに混じっての捜索の結果、1体だけ遺体を見つけることができた。鮮やかな赤いリュックの傍らに、完全装備した服装を身につけたそれは、すでに皮も内蔵も残っていなかった。風化したスカスカの骨になっていた。
骨の音だ…。穴だらけの石灰質の棒の羅列を思い描いて、吐き気がこみ上げてきた。表にいるのは、本当は何なんだ？人間なのか？
インターホンが鳴った。俺は飛び上がったと思う。ドアノブを掴もうとしたが、痺れたように腕が伸びない。人間じゃない。そうとしか思えなかった。人間の気配じゃない。

どれぐらいの時間、葛藤していたのか。
気づくと表の音はなくなっていた。それと入れ違いに室内から控えめな足音が近づいてくる。姉貴が不安そうな顔を覗かせた。
「いま、インターホン鳴らなかった？」
俺は弾かれたようにドアを開けた。
共用通路の常夜灯が、すでに誰もいなくなったコンクリートの床を照らしているだけだった。

生者か死者か（前書き）

この章には遺体の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

生者か死者か

寝不足の目をこすりながら出社した。地方都市のオフィス街に、俺の仕事場はある。
地下駐車場に車を突っ込み、エレベーターの上昇ボタンを押すと、急に脱力感が来た。睡眠不足のせいじゃない。過度の緊張感から解放された自覚が芽生えたせいだ。

朝まで姉貴宅で過ごした俺は、ちゃんと主婦をしているらしい彼女手製の朝飯を食って、マンションを出た。ドアを開けるときに、まざまざと深夜の物音を思い出す。見送りに出ている姉貴を何度も見返ると、
「何よ？うっとうしい」
とケチを付けられた。心配してやってんのに。
骨…いや、俺の妄想の中で、訪問者はもっと確実な姿を持っている。口を大きく開けた頭蓋。欠損している肋骨。粉を吹いた骨盤。折れた大腿骨。山の中で見つけた遭難者は生きて帰りたかった未練を全身で表していた。玄関の向こうにいた、あの質量の軽い存在は、生きている人間と同質の立場に見せようとしていた気がする。
「幽霊や妖怪なんてものが本当にいたとして…なぜ、それが姉貴のところに現れたかが謎だよな…」
あちらを立てればこちらが立たず。超常現象で推理してみても答えは出ない。

オフィスのドアを開けると、すでに出社していた先輩社員が、
「おはよっす。なんだ？冴えない顔だな」
とからかってきた。
「ちょっとあってね…。あんまり寝てないんです」
答えると、

「一晩中、何があったのかなあ？」
と下卑た笑いをぶつけてきた。
「そんないい話じゃ…」
苦笑しながら言い訳する。
そうこうするうちに、後輩の彩（あや）ちゃんが出社してきた。俺の顔を見るなり、
「どうしたんですかあ？顔色が、青いって言うより白いですよ」
と驚いた。そんなに病的な症状なのか、俺。
「あんまり追及するなよ。一晩中の作業で衰弱しきってるんだから」
俺が答えるより早く、先輩が茶々を入れる。
「違うっ。泊まったのは姉貴のとこだって！」
彩ちゃんの前で恥をかいたことに感情的になって、思わず声を荒らげた。
「お姉さんって、この前、結婚した？新居に泊まるなんて仲がいいんですね」
屈託なく笑う彩ちゃんは、その後、こっそりと、
「妬けちゃうなあ」
と呟いた。大きな瞳を伏せる仕草にドキッとする。

朝の定例業務をこなし、次の波が来るまでの時間をぼんやりと過ごしていた俺に、先輩が話題を蒸し返してきた。
「お前って彩っぴ狙いじゃなかったの？本当はどこに行ってたんだよ？姉貴の家で寝不足って変だろ」
こそっと耳打ちに忍び寄る小太りの体を押し返して、
「だから違うって」
俺は半ば笑いながら否定した。
「隣人トラブルってやつですよ。真夜中にインターホンを鳴らす非常識な馬鹿を捕まえようと思ったの」
「そりゃあ悪質だな。姉ちゃん、そんな馬鹿に絡まれてんのか」
「あの人も喧嘩腰なとこあるから…」

身内として、少々、姉貴に厳しい評価を下すと、彩ちゃんが聞きつけて寄ってきた。
「お姉さんに何かあったんですか？それで泊まったの？」
結局、俺は2人に顛末を話すことになった。

「なんだか妙な話だなあ。嫌がらせなら、もっと恫喝的なことしてもおかしくないんじゃないか？相手は複数なんだろ？」
先輩が珍しく真面目な顔で反応する。
「でも、お隣さんですし、自分の正体を知られるのは嫌なのかも」
彩ちゃんの意見も、至極、的を射てると思う。
「自分の立場を守りたいなら、俺なら、むしろもっと恐怖感を与えて話もできないようにさせるぜ」
「先輩は過激すぎですよ」
俺は割って入った。彩ちゃんの先輩を見る目が変わりつつある。
「訪問者が誰だって、今日にははっきりします。姉貴、今ごろ監視カメラを買いに行ってるはずだから」
そう説明すると、
「よかった」
と安心する彩ちゃんの横で、
「誰も映ってなかったりしてな」
とニヤつく先輩。
…もし、本当にそうだったら…。
「…幽霊が訪問してくるなんてこと、本当にあるんだろうか…」
一笑に付されると思って黙っておいた仮説を、思わず口にした。
「マジで受け取ったの？んなことあるわけないだろ」
嘲る先輩に対して、意外なことに彩ちゃんが俺を肯定した。
「そういうの、ないとは言えないんじゃないでしょうか…。だって、今朝の水嶋センパイの顔、生気が抜かれたみたいな色してた…」
俺は自分の顔を触ってみた。ちゃんと体温も持ってる。疲れも回復している。

「とり憑かれたみたいだった？」
笑ってそう聞くと、彩ちゃんは、
「ちょっと心配になりました」
と控えめに微笑んだ。

その流れを傍観していた先輩が、いきなり俺に受話器を突きつけた。
「あのさ、ちょっと面白くない、そういうの？『実録お化け屋敷！』みたいな」
「人事だと思って…」
調子のいい言葉に苦笑しながら、俺は受話器を受け取る。
「それでどうすればいいんですか？寺にでもかけて悪霊退治頼めって？」
「違う違う。かけるのは不動産屋」
先輩は自分のノートPCを手繰り寄せながら言った。
「よくあるだろ。そのマンションが建つ前は墓場だったとか沼地や井戸があったとか。それ、確認してみろよ」
「不動産屋なんか知りませんよ」
受話器を突っ返そうとすると、先輩はそれを遮って続ける。
「マンション名ならわかるだろ。検索してやるよ」
結果。大手の住宅情報会社がヒットし、俺も悪ノリで事故物件の是非を追及することにした。

会社を退社すると、そのまま姉貴宅に向かう。監視カメラの設置をしてやらないといけない。
「意外に安いのね、こういうの」
警告灯付きの丸いフォルムのカメラには数千円の値札が付いていた。
それを玄関のすぐ上に取り付けたあと、別売の受信装置を室内のビデオに繋ぐ。
「これって録画ＯＫなんだよな？」

確認すると、
「って店の人は言ってたわよ。白黒だけど」
答えが返る。録画機の電源を入れると、接続したモニターに外の様子が映し出された。
「よし、成功。明日の夕方また来るから、そのときに一緒に確認しようぜ」
促すと、姉貴は怪訝な顔をした。
「その前に見ちゃだめなの？」
不動産屋からは、特に手がかりは得られなかった。しつこく粘ってみたが、マンションが建っているのは山地を削りとった岩盤の上で、災害にも人災にも見舞われたことはなかったらしい。その回答を聞き、俺もいったんは「やっぱり隣か」と納得したんだが、このマンションに戻ってみると、言いようのない胸騒ぎが襲ってくる。ビデオに映った『もの』を、姉貴一人のときに見せたくはなかった。
「もし想像しないものが映ってたらショックだろ？」
軽口でごまかしながらそう答えると、姉貴は、奇妙に真剣な表情で尋ねた。
「それって…鳴らしてるのが、隣の母親じゃなくて子どもの方ってこと？」
「は？」
質問の意味がわからない。
「深夜2時だぜ？子どもが起きてるわけないだろ」
否定すると、
「でも…」
と言いあぐねる。続きを促すと、姉貴はくぐもった声で呟いた。
「なんていうか…気配がね、小さいのよ。大人の大きさじゃないみたいな…」
「……」
心当たりは…あった。軽い骨のような音の羅列は、子どもが跳ね踊っているようなリズムを刻んでいた。

俺は姉貴に向き直って、俺の想像と不動産屋の回答を伝えた。顔をしかめて聞いていた姉貴だったが、一瞬、パッと目を見開いたあと、

「そうだ！」

と笑顔になった。

「そういうこと知ってそうな人が近所にいるわ。９５歳のお爺ちゃんなの。おすそ分けに行ったりして顔を繋いでるから、話も聞かせてくれると思う」

次の俺の休みに合わせて、その老人宅を2人で訪問することにした。

屍ケ台　1（前書き）

この章には食人の表現があります。耐性のない方はお気をつけ下さい。

屍ケ台　1

順調に週末の休みが取れた俺は、この日、９５歳の長老宅を訪問するために、姉貴の家を訪れた。世間一般的にも休日に当たる曜日だからだろう、いつもすれ違ってばかりの義兄（あにき）にも挨拶することができた。

「カイさん、久しぶり」

姉貴と同じ呼び方で馴染むと、若干、小柄な義兄は背中を丸めて、

「久しぶりだね、リョウくん。君までサチの酔狂に付き合うとは思わなかったよ」

と妙に引っかかる返事をよこした。

俺は実はこの人をよく知らない。熱心に姉貴にプロポーズしていたのは見ていたけど、姉貴はむしろ、最初は冷淡だった。カイさんの情熱にほだされたのだろうか。男の俺から見ての彼の魅力は…まあいいや。結婚した後に論じる話題でもない。

「すぐにそういう冷めたことを言う。虐待の声を聞いたときもそうだったよね。関係ないからほっとけ、とか。カイさんは人間的に冷酷だと思う」

義兄の反応に噛み付く姉貴。義兄は軽く肩をすくめただけだった。夫婦げんかに巻き込まれるのも不毛なので、姉貴を促して早々にマンションを出る。

入り組んだ住宅街の路地を、いくつも曲がった。

「ここらへんは古くからの居住区みたいで、道が狭いのよね」

姉貴が言った矢先に、侵入してきた車が体側ぎりぎりのところを掠めていく。マンションから見るかぎりは、一面のススキ野原に囲まれた開放的な土地だと思っていた。でも一歩奥に入ると、こんなにゴミゴミとした風景になってたんだな。

近所という触れ込みだったが、ずいぶんと歩く。

「結構遠くない、その爺さんの家？」
姉貴の生活圏から外れようとしているのを見咎めると、振り返った姉貴は笑顔を作っていた。
「だって、うちのマンション評判悪いんだもん。近くの人はあんまり親しくしてくれないのよ」
「……何それ？」
意味がわからず問い返す。
　姉貴の話によると、引っ越した当初から感じている違和感があるそうだ。マンションのそばには戸建ての家屋がいくつか散在している。近所に顔を繋いだほうがいいと思った姉貴は、それらの家々に、機会があるときに出向いて交流を計ったらしい。最初はにこやかに対応してくれていた相手は、姉貴がマンション名を口にすると、急に表情を曇らせた。中には姉貴自身に距離を置く態度を見せ始めた家庭もあるようだ。
「それ、かなり重要な情報じゃねえ？姉貴のマンションが近隣に疎まれているってことだろ？その原因と訪問者の件が結びつくんじゃないか？」
勢い込んで言う俺に、姉貴は、
「うーん…そうかなあ…」
と懐疑的な返答をした。
「だって、うちのマンション、ゴミ出しのマナーも悪いし、不良学生が夜中に溜まったりもするのよ。そういうことで嫌われてるんじゃない？」
現実的な理由を突きつけられると、俺自身の考えも尻すぼみになる。
『幽霊屋敷』なんて遠因より『迷惑行為の横行』のほうが、近所にとっては、よっぽど敬遠する原因になるだろう。
　両脇に立ち並ぶ家屋が、やや歴史がかってきた。住宅地の奥は、古くから人が住み着いていたとの説明通り、５、６０年は経っていそうな趣を連ねている。車が入れないぐらい細い小路。幹の黒ずん

だ路傍の柿の木。一軒一軒の敷地が広い。通り過ぎた屋敷の立派な門構えの奥には、日本庭園が覗いていた。
「爺さんの家もこんなんなの？」
ちょっと不安になってきた。親父を早くに亡くした俺たちは、金持ちの生活に縁がない。今日の服装は思いっきりカジュアルだし、それらしい話題も用意してない。
「お爺ちゃん…芳賀（はが）さんっていうんだけど、芳賀さんの家はこのへんで一番大きいよ」
構えたふうもなくそう答える姉貴の格好は、エプロンを外しただけの内着だった。
「俺、失礼に当たらない態度なんか取れないぜ？」
そんな爺さんにどうやって話しかけろっていうんだよ？臆している ことを伝えると、姉貴は高笑いしながら、
「大丈夫よ。リョウちゃんがビビるような人に、私が話しかけられるわけないでしょ？」
とフォローした。俺はお前のほうがよっぽど肝が座ってると思ってるよ。

瓦屋根の乗った格子戸の門扉を開けると、姉貴は慣れた調子で、砂利の敷かれた庭先を横切った。平屋の堂々たる日本家屋が目の前にそびえている。磨りガラスを嵌め込んだ引き戸に手をかけてから、思い直したように、すぐ横に設置されたインターホンを鳴らした。
「いつもは挨拶してそのまま玄関に入っちゃうんだけど、今日はあんたも一緒だもんね。一応、礼儀」
人懐っこい姉貴の態度は、出迎えてくれた芳賀氏の家人の対応で納得が行った。
「やっと来た。待ってたわよ。お爺ちゃんも朝からご機嫌だったんだから。さ、上がって」
５０前後の穏やかな雰囲気の女性が俺たちを招き入れてくれる。年代と会話からいって、芳賀の爺さんの孫ってところか。軽く会釈を

してついていく俺の前で、姉貴と女性は華やかな声を上げながら世間話を始めた。そっか。そういえば姉貴は独身時代から男女問わず人気のある性格だったな。

襖で仕切られただけの部屋が、奥に向かっていくつも並んでいる。
「本当は客間に上がっていただきたかったんだけど、お爺ちゃんがどうしても自分の部屋に来てほしいっていうもんだから。ごめんなさいね。こんな薄暗いところまでお通しして」
女性、やはり芳賀氏の孫娘だと名乗る彼女は、俺に向かっても親しげな声をかけてくれた。
「いえ。こういう造りは珍しいので、拝見できて喜んでいます」
俺が答えると、姉貴が口を挟んだ。
「歴史に興味が有るくせに、資料館みたいなとこにはあんまり行かないのよね、リョウちゃんは」
そうだ。今日の俺の立場は『歴史好きで郷土の古老に史料を提供してもらっているアマチュア』だったな。
「江戸の宿場町の本陣みたいな資料館にはよく行くさ。でも、実際に人が住んでいる家屋は貴重だろ」
そう言い訳すると、孫娘は感心したように、
「本当にそういうものが好きなのね。わたしなんか、こんな家に住んでいても、ちっともありがたさがわからないから、尊敬しちゃうわ」
と言ってくれた。本当はボロが出ないように内心ヒヤヒヤしてるんだけどね。

１０以上の部屋を通った気がする。どの部屋も縁側から差し込む陽の光が、障子を通して室内に流れ込んでいた。現代家屋のようなサッパリとした明るさはないが、控えめな白い波長の光源が心地良い。
爺さんの居室は一番とっつきにあった。孫娘が襖を開けると、そ

こだけ、障子窓のない陰気な闇が漂っている。
「こんにちは、サチさん。待ってたよ」
床の間を背にした老人が、ゆっくりとした動作で立ち上がった。背が高い。高齢を感じさせない姿勢の良さに、俺は目を奪われた。９０を越えて生きる人間っていうのは、やはり、こんなふうに頑強なのかもしれないな。
「こんにちは、芳賀さん。こっちが話してた私の弟です。今日はお世話になりますね」
姉貴の紹介に、雰囲気に呑まれて呆けていた俺は、慌てて頭を下げた。
「涼二といいます。時間を取っていただいてどうも」
間抜けな挨拶を後悔しながら老人をちらりと見ると、無表情だった顔に笑みが差していた。
「サチさんに似て礼儀正しい弟さんだね。しかも、若いのに勉強家なんだろう？会うのを楽しみにしていたよ」
とりあえず批判的な態度を取られなかったことに安堵しつつ、でも姉貴の図々しさと同列に評価されたことに対して不満を感じた俺は、
「姉よりははるかに礼儀は心得ているつもりです」
と爺さんの言葉を訂正した。即座に姉貴から無言のパンチが飛んできた。

大きな座卓に出された茶と菓子を脇によけ、爺さんが古書の類を次々と積んでいく。町の郷土史。古地図。古文書。そして先代が書いていたという日記まで。
まさかマンションに現れるお化けの由来を調べたいとは言えなくて、便宜上、俺の興味と引っ掛けての来訪だったが、歴史に対して、俺はあながち無知でもない。と言っても高校の日本史レベルだが。学生時代、史跡巡りを趣味としている教師に授業を受け持ってもらえた縁で、教科書の活字でしか情報を与えられなかった同年代よりは明るい知識を持っている。…はずだ。

「この辺りは、昔、山だったと聞きました。それを削って宅地にしたとか。いつ頃のことなんですか？」
尋ねると、古老は、それがつい昨日だったかのような俊敏さで記憶を取り戻した。
「儂が生まれる数年前だから、明治の末期の頃だろう。それまで、この土地は…山というよりは小高い台地だった」
なるほど。俺は頷いた。不動産屋の説明と一致する。今では周辺の土地との標高差はないに等しいが、山地だった頃は、木も生えない硬い岩盤の斜面が覆う、ハゲ山、だったそうだ。
「芳賀さんは、その明治末期の開拓以前からこの場所に住んでみえたんですか？あまり住居には向かない環境だったと聞いていますが」
踏み込んでみると、爺さんは能面のような無表情になり、黙って古地図を開いた。手書きの細かい地名がびっしりと書きこまれている。
『荒谷』『石神』などの文字が複数見えた。
「この辺りは粘土質で米が取れず、水はけも悪かったから、雨が降るとよく浸水したらしい。儂らのご先祖も、他所の土地を追い出されたのでなければ、こんなところには住み着かなかっただろう」
言葉の端に微かな悪意を乗せて、そう生き字引は切り出した。
そして、数百年にも及ぶここでの過酷な生活を語り出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7532x/

屍ヶ台

2011年10月28日12時02分発行